

ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル  
- 写真で見る100年、過去から未来へ -

池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ  
立入正之、古田祐司

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

# ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル ー写真で見る100年、過去から未来へー

## Japanese in Brazil, Brazilians in Japan: 100 years in Photos - From the Past to the Future

池上 重弘

文化政策学部国際文化学科

Shigehiro IKEGAMI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

イシカワ エウニセ アケミ

文化政策学部国際文化学科

Eunice Akemi ISHIKAWA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

立入 正之

文化政策学部芸術文化学科

Masayuki TACHIIRI

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

古田 祐司

デザイン学部メディア造形学科

Yuji FURUTA

Department of Art and Science, Faculty of Design

本稿では、2008年10月に本学西ギャラリーにて開催された移民パネル写真展「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル～写真で見る100年、過去から未来へ～」について、その背景と目的、組織態勢、交流イベント、写真展の詳細等を報告する。写真展は(1)かつてブラジルに渡った日本人、(2)現在ブラジルで暮らす日系人、(3)現在日本で暮らすブラジル人の3つのセクションから構成された。これからの未来を担う子どもたちや彼らの夢にも焦点を当て、学生実行委員会と子どもたちとの交流イベントを実施した。その内容も展示の中で紹介された。

In this article we will report about a photo exhibition held in October 2008 at Shizuoka University of Art and Culture under the title of "Japanese in Brazil, Brazilians in Japan: 100 years in Photos - From the Past to the Future". The exhibition displayed the past and present in three sections: "Japanese Immigrants to Brazil in the Past," "Nikkei People Now Living in Brazil," and "Brazilian People Now Living in Japan." We focused on children as the torchbearers of the future and their dreams. We hosted three events to facilitate interaction and deepen mutual understanding between the Japanese people and Nikkei Brazilian children who live in Hamamatsu.

### 1 はじめに

2008年10月3日(金)から13日(月)にかけての11日間、静岡文化芸術大学西ギャラリーにて移民パネル写真展「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル～写真で見る100年、過去から未来へ～」(以下、写真展と略)が開催された。静岡文化芸術大学が主催し、JICA中部と静岡新聞社・静岡放送が共催に加わったこのイベントは、日本とブラジルとの100年の交流を記念する外務省の日伯交流年事業(認定番号166番)としても認定された<sup>1)</sup>。この写真展の特色は、単に既存の写真を展示するだけでなく、学生たちの手作りによる交流イベントの成果を写真や動画で展示し、子どもたちに焦点をあてた未来志向の展示を意図した点にある。マスメディアでもその点は大きく注目され、学内・学外から1,309人の来場者があった。

本報告ではまず、写真展の背景と目的を明らかにした上で、実施の主体となった組織について紹介する。続いて、写真展に先駆けて実施された子どもたちとの交流イベントにつ

いて詳述したい。写真展については、展示内容の紹介とならんで、期間中に開催された関連イベントについても触れる。最後に本写真展の成果について述べたい。写真展の開催に向けたほぼ1年間の経緯をたどると同時に、写真展自体について実施時の写真資料も合わせて紹介し、日伯交流100年目の2008年にブラジル人市民が全国最多の浜松市にある大学で写真展を開催する意義について考察することが本報告の目的である。

### 2 写真展の開催に向けて

#### 2-1 ブラジルへの移民の歴史<sup>2)</sup>

日本における移民の歴史は、1868年のハワイ移民に始まった。その後主に北米にて貴重な労働力として活躍したが、日露戦争後、日系移民の排斥が激化し北米への移民は制限せざるを得ない状況に陥った。一方1888年に奴隷制度が廃止されたブラジルでは、奴隷に代わる労働力としてイタリアやドイツなどヨーロッパからの移民が活躍した。しかし、劣悪な労働条件によりヨーロッパ各国からの移

民は停止され、ブラジル政府は労働力不足に頭を悩ませていた。そこに目を付けた皇国殖民会社はブラジル政府へ日本人移民の売り込みを行ってサンパウロ州政府と契約を結び、ブラジルへの農業移民の募集を開始した。

1908年、第1回移民船「笠戸丸」が日本人移民781人を乗せてブラジルへと旅立った。当時女性教師の月給が8円、巡査の月給が10円の時代に、ブラジルでコーヒーを採取すれば、一ヶ月で35円程度稼ぐことができたというのが、皇国殖民会社のうたい文句だった。しかし、1日で1人4俵は採れると言われたコーヒーは、実際には3人がかりで1俵にも満たない量しか採取することができなかった。日本人移民は、馬小屋同然の家、朝から晩までの重労働、減らない借金など、理想とは程遠い苦しい生活を余儀なくされた。なかには耐えきれずに農場から逃げ出す者もいたが、多くの移民は苦難を乗り越え、その後ブラジル農業の発展に大きく貢献した。また、都市に出て商業に従事する者も増え、こんにちでは日系人はブラジル社会の重要な構成員となっている。

## 2-2 日本におけるブラジル人の増加と現状

1980年代に入ると日本は急速な経済成長を遂げ、労働力不足に陥った。一方ブラジルでは景気が悪化し、失業率の上昇が深刻化していた。1990年に「出入国管理及び難民認定法」が改正施行されると、数多くのブラジル人が就労を目的として来日した〔池上2001〕。2007年12月末時点では日本全国で約31万人のブラジル人が暮らし、製造業が盛んな浜松市には全国最多である約2万人のブラジル人が生活していた。彼らは地域経済を支える労働力として不可欠な存在だったが、2008年9月のリーマンショックを皮切りとする世界同時不況の中で彼らを取り巻く状況は激変した。製造業分野の非正規労働者として働いていたブラジル人労働者の多くは職を失い、家族滞在の増加、滞在の長期化など、定住化が進展しつつあった彼らの生活基盤の根底が崩れ去ることになった〔池上2009〕。

本写真展が企画されたのは2007年秋であり、開催時の2008年10月時点ではブラジ

ル人の雇用環境の一部悪化がささやかれていたが、こんにちのような深刻な事態が生じることを正確に予想していた者はごくわずかだったと思われる。しかし、経済危機後もなお日本に留まることを選択したブラジル人も多く、以下に述べる本写真展の目的は変わらぬ重要性を持っていると言えよう。

## 2-3 写真展開催の背景と目的

写真展企画の発端は、2007年春にJICA浜松デスクに着任した大石真理子氏との会話だった。日伯交流100年の記念としてJICAが移民の歴史をたどる写真パネルセットを作成し貸与するという話（その時点では詳細は未定だった）をうかがい、その後浜松市も含め全国各地でパネルセットの展示が行われると聞き、そのパネルセットを活用しながらも浜松にある本学ならではの企画ができないかと考えた。研究メンバーでもあるイシカワ准教授と相談する中で、ブラジルへ渡った移民の歴史を単に紹介するだけでなく、日本人が案外知らない現在のブラジルにおける日系人社会の様子や、現在浜松で暮らすブラジル人の様子も知ってもらう機会にしようという構想が固まった。

写真展の目的は、ブラジル移民100周年にあたる2008年に、全国で最多のブラジル人市民が暮らす浜松市において、本学の特性を十分に活かし、かつ本学学生とブラジル人児童生徒との交流の機会となるような写真展示と関連イベントを通して、日本人市民とブラジル人市民の相互理解と相互交流を図ることであった。

## 2-4 写真展の組織態勢

上記の目的を実現すべく本学の学長特別研究として写真展を開催する上で留意した点がふたつある。ひとつは展示の質を高めるために専門の教員を含めたチームを構成すること、もうひとつは学生実行委員会を組織して学生たちの主体的企画を中心としたプロジェクトを実現することであった。

第一の点については、学長特別研究の申請時に4名の研究チームを構成できた。国際文化学科のイシカワ准教授は移民研究の観点から展示内容を監修し、ブラジル人コミュニティとの

調整役を担当した。美術館での勤務経験を持つ芸術文化学科の立入講師はアートマネージメントの観点から展示企画を監修した。映像デザインの専門家であるメディア造形学科の古田教授は、子どもたちとの交流イベントのVTR撮影と編集、子どもたちの顔写真のマルチディスプレイでの展示を監修した。研究代表者である国際文化学科の池上は研究及び展示企画・関連イベント実施を統括し、学外機関との調整を担当した。

第二の点については、本学の6つの学科からさまざまな学年の学生たちが参加し実行委員会を組織した。2007年11月に学生準備委員会が結成され、12月には学生たちから予備的な企画案が提出された。2008年3月末の学長特別研究正式採択を受け、4月下旬に川勝平太学長（当時）も出席して第1回学生実行委員会が開催された。以後、5月には新メンバーを補充して、80名規模の学生実行委員会が動き始めた。

学生実行委員会には全体を統括し教員メンバーとの調整役となる委員長と副委員長がおかれ、広報、コラボ、展示、説明パネル、イベントの5つの部門が作業を分担した。教員メンバーは大まかな方向を示した上で監修役を果たすように機能し、なるべく学生たちの自主性を尊重した。各部門はリーダーの指導のもとに自分たちの希望する活動について企画書を作成し、部門内・部門間で調整と合意形成を図った上で、予算管理についても留意しながら活動を展開した<sup>3)</sup>。

教員側は第1回学生実行委員会で2つの重要なコンセプトを提示した。「ユニバーサルデザイン」と「リスペクト」である。写真展には日本人のみならず日本語を解さない外国人が来場する可能性があるし、高齢者や子どもの来場もありえるため、パンフレット、パネル説明等での多言語表記、文字の大きさや見やすさへの配慮等、ユニバーサルデザインを意識した対応を求めた。また、移民の歴史やブラジルでの日系人の足跡、そして現在の日本における地域産業への貢献に対するリスペクト（敬意を払うこと）の気持ちを忘れずに取り組みよう求めた。

学生実行委員会のうち、各部門は以下のよう  
な活動を担当した<sup>4)</sup>。

- （1）広報部門はポスターやチラシの作成、フリーペーパーや各種情報サイトへの広告依頼等、外部向けの広報活動を担当し、さらに市内企業に協賛を呼びかけパンフレットへの広告を依頼した。
- （2）コラボ部門は、子どもたちとの交流イベントを企画・運営し、その際に展示用の写真や動画を撮影した。また、浜松市内の小学校や日本語補習教室、ブラジル人学校等で学ぶブラジル人の子どもたちの様子やブラジル人家族の暮らしについて写真撮影を担当した。
- （3）展示部門は、メイン会場となる本学西ギャラリーおよびエントランスの展示と、浜松市のプレスタワー1階でのプレ展示を担当した。
- （4）説明パネル部門は、展示に関わるキャプションやパネルおよびパンフレットの説明文を作成し、翻訳のアレンジを担当した。また、学生実行委員会メンバーの知識を深め、写真展に向けての意識向上を図るため、勉強会を企画し運営した<sup>5)</sup>。
- （5）イベント部門は、関連イベントとして会期中の10月4日、日本人小学生を対象にブラジルや日系人について理解を深めるためのワークショップを開催した。また、会期中の土日には来場者にブラジルコーヒーを提供し、ブラジルの味覚への理解を深めてもらった。

### 3 子どもたちとの交流イベント

本写真展では日本社会で生きるブラジル人（とりわけ子どもたち）にも焦点を当て、未来を担う子どもたちや彼らが持つ夢をテーマに、浜松に住む日本人とブラジル人の子どもたちとの交流・相互理解を深める機会となる3つのイベントを開催した。ここでは、学生実行委員会コラボ部門によるオリジナル企画のイベントについて、学生たちが作成した企画書の内容をなるべく活かしながら、その概要と成果を紹介したい。

#### 3-1 座談会

「ブラジル人大学生と高校生との座談会」は2008年7月19日（土）に静岡文化芸術大

学にて開催された。本学に在籍するブラジル人学生3名が自ら企画し、浜松市内の公立高校（全日制普通科）に通うブラジル人高校生8名と共に4時間ほど、進路や悩み、ブラジル人としてのアイデンティティ等、この国での生活や将来について語り合った（写真1、2）。座談会担当の3人のブラジル人大学生が作成した企画書には、この座談会をどのような場にしたいかが以下のように記されている。

日本で育っているものの、今後の進路に悩むブラジル人高校生を対象に、将来の夢や進路について考えるきっかけとなる場。

自分と似たような境遇に立つ、近い年齢のブラジル人高校生らと積極的に意見を交わし、またブラジル人の現役大学生と直接話をするにより、より現実的・多面的に自らの将来を考えていく場。

進路の話だけではなく、日本社会に求めることや家庭での問題、親との意見の相違点など、意見や悩みを共有しあい、より良い未来を考えるための飛躍

の場。

その上で、「ブラジル人学生が梓にとらわれない独自の未来を、自らの手で切り開いていくことを最大の目的とする」と明記している。ブラジル人の子もたちの大学進学の実例がまだそれほど多くない現状において、浜松で育ち地元の大学に進学した「先輩」の姿は、大学進学をリアルにイメージする上での貴重なロールモデルとなる。企画した本学のブラジル人大学生たち自身、そのことを明確に意識しており、後輩にあたる高校生たちとの座談会実現に向けて並々ならぬエネルギーを注いだ。

また、座談会の最後に、参加した高校生にインスタントカメラを渡した。これは日常生活を写真におさめてもらう企画であり、彼らが普段どのような生活を送っているかを視覚的に知ること、写真展来場者にブラジル人学生の日常生活や大事にしているものについて理解してもらうための素材となることが期待された。

高校への資料送付とアポ取り、訪問は、ブラジル人大学生たちだけで行った。このよう



写真1 座談会の全体討論



写真2 座談会のグループ討論



写真3 巨大絵の中心部に手形をつける



写真4 巨大絵の周辺部に絵を描く

な学生たちの行動力は、高校側にも強い印象を与えた。メディアも関心を寄せ、座談会当日は新聞各紙の取材があった。また、静岡新聞は座談会の事前準備段階でも記事を掲載したし、NHK静岡放送局はほぼ半年間の丁寧な長期取材に基づきニュース番組の中で11分間を割いて紹介した<sup>6)</sup>。

### 3-2 巨大絵

2008年8月3日(日) 本学の夏のオープンキャンパスに合わせる形で、巨大絵「ドリームキャンパス～ポアタージ! 手をつなごう～」が行われた。小学生を対象としたこのイベントでは、日本人の小学生、公立小学校に通うブラジル人の小学生、ブラジル人学校に通うブラジル人の小学生がそれぞれ10名ずつ、計30名が参加した。本学の出会いの広場に、シーツを縫い合わせて作った巨大な布を広げ、「手を取り合って共生していこう」という意味を込めて、絵の具を塗った手で絵を描いてもらうことを最大の主旨とした。当初の企画では、絵の具は赤・青・黄の三原色と白黒の5色のみを用意し、あとはそれぞれの色を手のひらに塗った子どもたちが友達と手と手を合わせて新しい色(たとえば、赤と白でピンク)を作り出すことにしていた。実際にはパレット等を使って色を作る場面も多かったが、「夢」をテーマに、モチーフの作成から背景の色付けまで、子どもたちの発想を学生たちがサポートして一枚の巨大絵を作成した(写真3、4)。

また、布に絵を描き始める前のアイス・ブレーキングとして、白いTシャツに手形をつ



写真5 Tシャツに絵の具で手形をつけるゲーム

けるゲームを行った。子どもたちどうしの交流を深めるきっかけとして、また参加した仲間との出会いを形に残すために、白色Tシャツを用意し、Tシャツにジャンケンゲームをしながら手形をつけていった(写真5)。熱中症対策で用意した麦わら帽子に赤・青・黄・緑のいずれかの色のリボンを巻いて色別にチームを組み、手にチーム色の絵の具をつける。別のチームの人とジャンケンをして、勝ったら相手のTシャツに自分の手形をつける。制限時間内に対戦相手を次々に変え、手形の数の少ないチームが勝ちとなる。Tシャツは巨大絵を描いている間に乾燥させ、お土産として渡した。

ブラジル人の子どもたちの保護者が見学に来てくれたが、オープンキャンパス当日でもあったため、イシカワ准教授が学内を案内した。本学には浜松で育ったブラジル人学生も在籍しているため、日本の大学に関心を持つ保護者もあり、ブラジル人保護者に本学を知ってもらう機会にもなった。また、座談会に参加した高校生の一人が通訳を買って出てくれたし、別の高校生は一家四人で参加してくれた。こうして交流イベントを通じて本学の学生とブラジル人高校生とのつながりが強化された点も大きな収穫であった。

### 3-3 料理会

「ブラジル・日本 まぜまぜクッキングウ～」と題した料理会では、日本に住むブラジル人の子どもたちと食文化を通して交流し、彼らの生活の様子を知ると同時に、お互いの食文化について興味、関心、知識を深めることを目的とした。

2008年8月9日(土)に本学で行われた交流会には、浜松市内のブラジル人学校に通う中学生相当のブラジル人の子どもたち13名が参加した。ブラジル料理、日本料理について紹介し、その料理の意味やどんなときに食べるものなのか、よく食べるものか特別な料理なのか、おいしいのか、好きか嫌いか、家庭での食生活などについて意見を交わした。こうして翌週の料理会につながる信頼関係を築いた。

2008年8月16日(土)にクリエート浜松4F クッキングルームで行われた料理会に

は、交流会に出席した子どもたちを中心に、ブラジル人学校に通う10名の参加があった。実行委員会の学生たちも加わって6グループに分かれ、それぞれのグループが日本料理とブラジル料理を1品ずつ作った。お互いの国の食文化に直接触れることで、相手の文化の理解だけでなく、自国の文化への理解にもつながった(写真6)。

交流会実施時には言葉の壁への配慮に欠ける部分があり、参加した子どもたちと十分に交流できない面もあった。そのため、その後の1週間で実行委員会では対策を練り、料理会当日は十分な交流を図ることができた。第1回実行委員会で提示したユニバーサルデザインとリスペクトという2つの基本コンセプトの重要性を改めて痛感する機会となった。

#### 4 写真展の詳細

##### 4-1 展示内容

1908年のブラジルへの移民開始から2008年までの100年について、「かつてブラジルに渡った日本人」、「現在ブラジルで暮らす日系人」、「現在日本で暮らすブラジル人」の三部構成でたどるよう展示物を配置した(写真7)。その際、子どもたちにスポットを当てることにした。未来に向かって生きようとする彼らの姿は、100年の時間の流れの中でも変わらない。写真や動画に登場する多くの子どもたちの姿を通して、日本人・ブラジル人が「共に生きていく」ことについて考えるきっかけになれば、との願いが込められている。3つのセクションについて学生実行委員会が説明パネル用に作成した文章を以下に



写真6 料理会での本学学生(左)とブラジル人中学生(右)

引用しよう。

##### (1)第1章 かつてブラジルに渡った日本人

今から100年前、ブラジルへと旅立っていった日本人たちは、誰もが大きな希望を胸に抱いていました。洒落た西洋風の生活や、一攫千金を夢見てブラジルの土を踏んだのです。しかし、そこで待っていたのは想像を絶する貧しい生活、朝から晩までの重労働など、期待とは正反対の厳しい現実。なかには農場から逃げ出す者もいた程でした。大人だけでなく子どもたちも労働に従事し、小さな体で必死に働きました。しかし、多くの人々は夢をあきらめず、自らの力で未来を切り開いたのです。子どもたちも、希望を捨てない大人たちの背中を追って、強く生き抜きました。写真の1枚1枚から、ブラジルに渡った日本人たちの覚悟や強い思いが感じられるのではないのでしょうか。

##### (2)第2章 現在ブラジルで暮らす日系人

移民開始から100年。現在でもブラジルには約150万人の日系人が暮らしています。かつて農業でブラジルに貢献した日本人の子孫たちは、今ではビジネスマンや店主、料理人など様々な分野で活躍しています。こうして世代が深まっていく中、日本の場所すら知らない子供たちも増えつつあります。日本の伝統芸能や季節行事などについて、子どもたちは本来の意味を理解しているわけではないのですが、それを「日本の文化」とし



写真7 西ギャラリー内の展示内容

て捉えています。1世が「祖国を忘れまい」と伝えた日本の心は、子供たちのアイデンティティの一部となり受け継がれているのです。「ブラジルの中の日本」に生きる彼らのいきいきとした表情に注目してください。

(3)第3章 現在日本で暮らすブラジル人

現在、浜松市には2万人のブラジル人が暮らしています。しかし、多くの場合、日本人とブラジル人の接点はほとんどなく、日本人のブラジル人に対するイメージは「単純労働者」という程度に止まっています。一口に「ブラジル人」といっても、その境遇はさまざまです。特に子どもたちのなかには、見た目がブラジル人でも日本語しか話せない、学校では日本語だけれど家ではポルトガル語で話す、というような複雑なアイデンティティを持つ子もいます。子どもにとっては言葉や文化などの壁は厚く、いじめなどの理由も加わって、学校に行っていない

い子どもが数多くいます。しかし一方で、問題に直面しながらも明るく前向きに生きている子どもたちもいます。そんな子どもたちを集めて行った交流イベントでは、国籍に関係なく、皆が楽しんでいました。言葉や文化は違っても、私たちは同じことで笑いあえるのです。本章では子どもたちに焦点を当て、彼らの夢や未来へのメッセージを発信します。日本で懸命に生きる子どもたち。そのキラキラと輝く姿を目にやきつけてください。

第1章では、JICA 横浜、海外移住資料館、ブラジル日本移民史料館、毎日新聞社から提供を受けた写真と物品を展示し、100年前に日本からブラジルに渡った日本人たちの様子を紹介した。移民の歴史について知識を持たない日本人にとってはもちろんのこと、来場したブラジル人学校の生徒たちにとってもルーツを知る重要な機会となった(写真8、9)。



写真8 かつての移民のパネルを見る  
ブラジル人学校の生徒たち



写真10 現在ブラジルで生きる日系人1



写真9 かつての移民のパネルを  
見る来場者



写真11 現在ブラジルで生きる日系人2

第2章では、現在ブラジルで生活する日系人たちの様子を紹介した(写真10、11)。ブラジルのサンパウロ新聞社に所属する4人の日本人記者が撮影した写真を主軸としながらも、特別研究費の資金助成を得て2008年5月に渡伯した池上が撮影した写真も展示に加えた<sup>7)</sup>。

第3章の「現在日本で暮らすブラジル人」で



写真12 座談会の様子を伝える動画と写真

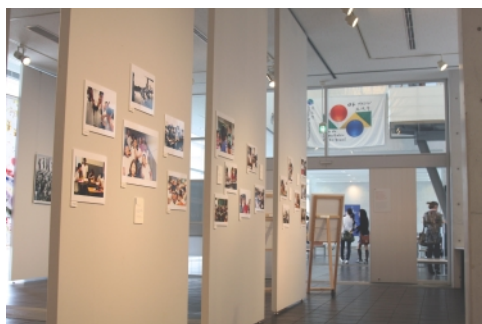


写真13 日本で学ぶブラジル人の子どもたち



写真14 座談会に参加したブラジル人高校生が撮影した日常の様子

は、浜松市内の公立学校やブラジル人学校等で学ぶブラジル人の子どもたちの様子と、実行委員会が企画運営した交流イベントの様子を写真と動画で紹介した(写真12)。地域経済を支える工場労働者としてのブラジル人の姿も日本人来場者に知ってもらいたい点だったが、未来に向けて学ぶ子どもたちの姿こそ知ってもらいたいという学生実行委員会の気持ちが反映された展示内容となっていた(写真13)。「座談会」に参加したブラジル人高校



写真15 ギャラリー外面に向けて展示した巨大絵



写真16 エントランス部分の様子



写真17 マルチディスプレイ(左)とJICA コーナー(右)

生たちがインスタントカメラで撮影した日常生活の写真も、「これが私達です」とのタイトルのもと、コルクボードに貼った形で展示された（写真14）。

以上が展示の中核部分だが、写真展ではギャラリー外面やエントランス部分も活用して展示内容のヴァリエーションを広げた。ギャラリー外面は本学西側の道路から視認性が高く、また循環まちバス「く・る・る」の停留所にも面している。外面内側に巨大絵をつり下げて展示し、イベントの開催をアピールした（写真15）。エントランス部分では、TVモニターを12台並べたマルチディスプレイが目玉展示となった（写真16）。パネルとして展示された写真に限らず、今回の写真展に関連した入手した写真から子どもたちの姿を切り出し、それが次々に映し出される展示となった（写真17）。100年に及ぶ時間の幅、日本とブラジルという地球の正反対に位置する空間の違いを乗り越えて映し出される子どもたちの顔が、「子どもたちの姿を通して共生を考える」という本写真展の中心的なコンセプトを象徴していた。



写真18 関連する新聞記事



写真19 巨大絵で使ったTシャツの展示

マルチディスプレイの反対側には関連する新聞記事（写真18）と、巨大絵の際に学生実行委員会が着用したTシャツを展示した（写真19）。また、ギャラリー入口手前には、日本からの最初の移民船をサントス港で迎えた5人の日本人通訳の一人、平野運平氏（静岡県出身）の等身大写真と彼にまつわる写真を展示した。また、マルチディスプレイの隣には、共催のJICAのコーナーを設け、JICAの事業に関するパンフレットやチラシを配置した。

今回の展示では来場者が展示物の一部を作成できる参加型の展示も導入された。ギャラリー内の最後の部分に色画用紙を丸めて麦わら帽子をかぶせたポールを配置し、「未来に残したいもの」を紙片に書いて貼り付けてもらった。日本語の紙片はもちろん、ブラジル人来場者が記したポルトガル語の紙片も多数あった（写真20）<sup>8）</sup>。

#### 4-2 会期中の関連イベント

会期中の10月4日（土）本学にて「わくワークショップ ブラ知」る - ブラジルと日本のことをもっとよく知ろう - と題したイベントが行われた。これは学生実行委員会のイベント部門の企画運営によるもので、JICA中部の共催を得て、浜松市内の小学5・6年生の日本人児童25名を対象に開催された。このイベントは、日本人児童にかつてブラジルに渡った日本人移民や現在日本で暮らす日系ブラジル人のことを知ってもらい、さらには同じ日本社会で暮らす外国人を理解するきっかけをつくることをねらいとしていた。



写真20 参加型展示「未来に残したいもの」（手前）と紙片記入コーナー（奥）

「グループワークによる回答選択式クイズ」、「母国を離れ外国で暮らす“外国人”の立場を考えるイメージ体験」等を通じて、自分の持つ先入観に疑問を抱き、自らが相手のことを知ろうとする努力の大切さに気づいてもらうことを意図した(写真21)。「座談会」に参加したブラジル人高校生が自らの体験を日本人小学生の前で話す場面もあり、日本人児童にとって知見を広げる機会であったと同時に、ブラジル人高校生にとっては、2つの文化にまたがる自分の存在をポジティブに捉え直す機会にもなった(写真22)。

また、実行委員会イベント部門は会期中の10月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)の4日間、ブラジルコーヒーを来場者にサービスし、食を通じてブラジル文化に触れてもらう機会を提供した。

10月11日(土)には、静岡文化芸術大学(外国人調査ポルトガル語フォーラム実行委員会)他が主催する「ポルトガル語でのディベート - 浜松市におけるブラジル人の生活」と題したポルトガル語でのシンポジウムが本学の

中講義室にて開催された。2006年に浜松市で実施されたブラジル人対象の実態調査の結果を報告すると共に、ブラジル人の日本での生活についてポルトガル語で討議する機会であり、80名ほどのブラジル人が参加した(写真23)。事後、軽食を用意した懇親会を西ギャラリー前エントランスで開催したため、参加者のほとんどが写真展に足を運んだ(写真24)。このようにポルトガル語シンポジウムはブラジル人コミュニティと本学との接点を強化する上でも貴重な機会となった<sup>9)</sup>。

10月12日(日)には、本学講堂にて日伯移民100周年記念事業実行委員会、浜松市、静岡文化芸術大学が主催する「日本ブラジル移民100周年記念シンポジウム」が開催され、池上がシンポジウムのコーディネーターを務めた。このシンポジウムは実質的に浜松市国際課が主催するイベントだったが、来場者の多くが同時に写真展も見学した。

#### 4-3 来場者アンケート

来場者1,309人に対し会場出口で無記名



写真21 ワークショップの説明に聞き入る小学生たち



写真23 ポルトガル語でのシンポジウム



写真22 ワークショップで自分の体験を語るブラジル人高校生(中央でマイクを持つ)



写真24 エントランスでの懇親会で意見交換するブラジル人参加者

アンケートへの回答を依頼したところ、553人(42.2%)が回答してくれた。学内開催だったため、本学学生の来場が多数を占めた。そのため女性では20歳代が大半を占めるが、男性では40歳代や60歳代の回答も目立つ。居住地では浜松市内が59%、県内が33%、県外が5%、その他が3%で、浜松市内ないし県内在住者が多かったが、県外からの来場者もあった。職業については社会人が42%でもっとも多く、次いで本学の学生が35%となっている。高校生6%、他学生3%、小学生1%、その他13%と続く。以下では、自由記述の中から典型的なものを5つ紹介したい。

ブラジルときくと、様々な固定観念が浮かんでいたのですが、ブラジル人の悩み、苦労を始めて知りました。日本で暮らす勝手な考えでものごとを決めつけず、もっと物事の本質をみていけたらと思いました。(10代女性、学生)

普段身近でブラジル人の子供たちの様子などを知る機会がなかった為、こんなことを考えているんだと、リアルな気持ちを知れてよかった。

(20代女性、社会人)

学生による座談会が非常に興味深く、有意義な企画だった。特に、子弟の教育、進路を巡る親子の意識の違いは、いままで全く知らなかった。若い日系ブラジル人たちの将来への思いや現在、不安をもっと聞いてみたい。その第一歩として今回の展示は素晴らしい!(30代男性、社会人)

これからの社会は(特に浜松)は、外国人と共存していかなければいけません。一番共存の国、ブラジルからは私達日本人は学ぶべきことが沢山あるはず。少しでも浜松の日本人がブラジルに対して興味をもち、心を開いて欲しいと心から思います。

(40代男性、その他)

仕事を通じて日系ブラジル人の方々と接点ができ、ポルトガル語を勉強するようになりました。明るくパワフルなところは日本人も見習うべきだし、

もっと理解を深め共生の道をさぐる必要があると思います。まだまだ「外国人」に対してバイアスがあるのが本当に本当に残念です。今日見たVTRを見せたい浜松の大人がいっぱいいいます。いつかはそんなこと考えなくてもよい環境になるといいと思います。しなくちゃいけない!自分にもできることを少しずつやっていきたいです。

(40代女性、社会人)

## 5 むすび

今回の写真展が本学の独自性を十分に活かした内容になったことは、本稿の記述からも明らかだろう。この写真展は単に写真を展示する機会としてだけでなく、浜松という地理的条件を反映し、日本人とブラジル人との接点にもなった。学生実行委員会が企画運営した交流イベントや会期中のイベントはもちろんのこと、ポルトガル語でのシンポジウムや浜松市が実質的に主催した記念シンポジウムとの相乗効果も大きかった。

学生実行委員会が主体的に関わったため、文化政策学部の学生にとっては多文化共生やまちづくり、展示イベントの企画立案について深く学ぶ機会となったし、デザイン学部の学生にとっては写真や動画というメディアが社会的意味を持つことについて理解を深める機会となった。また、会期中の10月5日(日)は秋のオープンキャンパスだったため、受験生や保護者にも本学の研究・教育の成果を広報することにつながった。

展示パネルやパンフレットでは、日本語・ポルトガル語・英語の多言語対応をしたことから、ブラジル人学校の生徒たちをはじめ、ブラジル人の来場者も多数あった。

とりわけ、交流イベントの一環として行われた「座談会」は、直接的には本学に在籍する3名のブラジル人大学生と浜松市内の公立高校に在籍する8名のブラジル人高校生が4時間にわたって語り合う貴重な機会であったが、NHKニュースや新聞各紙で取り上げられた上、そのエッセンスを編集したDVDが展示の中で紹介され、大きな反響を呼び起こした。同じ背景ながら日本で大学進学を果たし

た先輩たちの姿は、彼らに続く世代にとってのロールモデルとなり、進学意欲を高めるための大きな動機となるはずである。

写真展終了後の2008年末にはブラジル人の雇用環境は激変し、「座談会」参加者の中にも保護者の失業により一時休学して家計を支える者も出てきた。ブラジル人をめぐる雇用情勢は依然として厳しいが、日本に留まることを決意した家族も少なくない。子どもたちの未来を見据えて開催された今回の写真展は好景気の時代のあだ花ではなく、厳しい時代だからこそ求められる日本人とブラジル人の相互理解に資するものであったと言えるよう。

#### 注

- 1) 本イベントについて、静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、浜松市教育委員会の後援と、財団法人はましん地域振興財団の協賛を得た。さらに、浜松市による日伯移民100周年記念事業「浜松記念事業」の一環としても位置づけられ、市のホームページや記念事業パンフレットでも紹介された。
- 2) この部分は、藤崎[1997]、内山[2001]による。
- 3) 学生実行委員会は必要に応じて教員メンバーの指導を仰いだ。教員メンバーも数回の情報交換ミーティングを開催したし、実行委員会の全体会議はもちろん、実行委員長、副委員長、各部門リーダーが出席する企画会議にも参加した。
- 4) 学生実行委員会の活動については、実行委員長が作成したブログを通じて情報提供が図られた。<http://suac.zero-city.com/> を参照。
- 5) 2007年1月、2008年6月、同7月の3回、学内で勉強会を実施した。また、2008年6月にはJICA

浜松デスクの大石真理子氏によるワークショップを開催した。このワークショップは実行委員会の学生たちにとって、異文化理解の視野を広げる上で重要な機会となった。

- 6) 座談会についてはその全貌を文字化した報告書が作成されている[鏡田・池上 2009] また、そのハイライト部分を編集した25分のDVDも視聴可能である。希望者は池上(ikegami@suac.ac.jp)までご連絡いただきたい。
- 7) 渡伯時に多大なご協力をいただいたサンパウロの阿部義光氏と中村進氏に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。
- 8) 展示物の詳細については、ポスターを作成した本学デザイン学部4年(当時)の桑田亜由子氏が作成した図録コンパクトディスクで閲覧できる。ただし、著作権の問題があるため、一般には公開していない。閲覧希望者は池上までご連絡いただきたい。
- 9) このシンポジウムの実質的主催者は池上と伊シカワであった。シンポジウムの内容については伊シカワ・池上[2009]を参照。

#### 引用文献

- 池上重弘編 . 2001 .『ブラジル人と国際化する地域社会 - 居住・教育・医療 - 』 明石書店。
- 池上重弘 . 2009 .『雇用環境悪化の中で外国人労働者が置かれている現状と今後に向けた課題』『自治体国際化フォーラム』235 : 2-4 .
- 伊シカワ エウニセ アケミ・池上重弘 . 2009 .『ポルトガル語でのディベート - 浜松市におけるブラジル人の生活 報告書』静岡文化芸術大学 .
- 内山勝男 . 2001 .『蒼氓の92年 - ブラジル移民の記録』東京新聞出版局 .
- 鏡田彩乃・池上重弘 . 2009 .『ブラジル人大学生と高校生との座談会 - 移民パネル写真展の関連イベントとして - 』静岡文化芸術大学 .
- 藤崎康夫 . 1997 .『日本人移民 2 . ブラジル』日本図書センター .

